

# 若者が政治への信頼を育む機会はどれだけあるのか？

シチズンシップ共育企画代表 川中大輔

若者の政治参加を考える前に、まず自分のことを考えてみて欲しい。あなたは、政治に関わる意味や投票に行く意味をどのように感じているだろうか。私が問いかけたのは、理解ではなく感じ方である。もし、あなたが、或いはあなたの周りの方々が、その意味を実感できていないのであれば、それはなぜだろうか。政治参加にあたっては、各種情勢やそれに応ずる政策について理解して考えることが求められ、その深度をあげて意見表明や熟議、創造的調停の過程に踏み出せば、コミュニケーションコストは増すばかりである。面倒で煩わしいことは否めない。政治参加や投票行動の有意性を減じている「正体」を問題にせず、若者の政治参加を嘆くのは筋違いではないだろうか。

一人ひとりの市民の意見に耳を傾けて応答し、必要であれば代弁／実現しようとする態度が意思決定者から感じられなければ、意思決定者を選ぶことも意思決定過程に関与しなくなるのは当然である。そも

そも変わったことすらなければ、尚更だろう。若者世代の政治制度への不信感の高まりは、欧州委員会白書『欧州の若者のための新たな一押し』（2001年）でも指摘されているが、日本学術会議『提言 各種選挙における低投票率への対応策』（2014年）でも「政治への信頼感」と「政治的有効性感覚」の低さが低投票率の原因として指摘されている。

だからこそ、例えばフィンランドのユースワークでは、身近な小さな事柄から参画の機会を設け、「意思決定者との対話」の経験を重視して、シテイズンシップ涵養を進めている。日本では、どれだけ「私」の声を聴いてもらえたという実感を持って大人になるのだろうか。内閣府『平成25年度わが国と諸外国の若者の意識に関する調査』（2014年）での「将来の国や地域の担い手として政策決定に参加したい」との質問に対し、「そう思う（7.7%）」「どちらかと言えばそう思う（27.7%）」という回答は、比較七カ国中で最も

低い。既に政治に参加している若者の経験に耳を澄ましながら、多様な層の若者に対して、自らの影響力を感じられる参画機会の拡充を図ることが求められている。

アリストテレスは『政治学』の中で、政治とは「人々が生きるために生じたのであるが、彼らがよく生きるために存在するものである」と述べている。私たちが「よく生きる」ために、本当に何が必要か。その必要を充たすための方法は何か。その方法の中で、いわゆる政治と関わるものが何であり、意思決定者とのように対話して実現させていくか。一見迂遠なようだが、若者がこうした問いと向き合い、活動していく場を地道に設けていくことが若者と政治のつながりの回復の道ではないだろうか。

## ■プロフィール

川中大輔（かわなかだいすけ）  
兵庫県生まれ。関西学院大学社会学部卒。立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 修士課程修了。2003年にシチズンシップ共育企画を設立し、参加型社会の実現を目指して、「市民としての意識と行動力」を育む学びの場づくりに取り組んでいる。

